



「紀尾井シンフォニエッタ東京」 ドレスデン音楽祭で大きな成果

(財)新日鉄文化財団



街角に立てられた音楽祭の看板



会場となったゼンパー・オパーの前で「紀尾井シンフォニエッタ東京」

5月13日から29日まで、ドイツのザクセン州ドレスデンで行われたドレスデン音楽祭に、「紀尾井シンフォニエッタ東京」が日本のオーケストラとしては初めて、音楽祭のメインのコンサートを担当するレジデント・オーケストラとして招聘され、合計4回公演し、大成功を収めた。新日鉄が長年行ってきた音楽を通じた社会貢献活動が、クラシック音楽の本場であるヨーロッパでも、高く評価されたものであり、「NPO法人紀尾井シンフォニエッタ東京」とそれを支える(財)新日鉄文化財団の活動に注目が集まっている。

10年かかって築き上げた 「紀尾井シンフォニエッタ東京」

「紀尾井シンフォニエッタ東京」は、1995年、完成したばかりの紀尾井ホール(*)を拠点とするオーケストラとして発足し、2002年には特定非営利活動法人となり、レベルの高いユニークな活動をしていることで、近年一層の注目が集まっている。「紀尾井シンフォニエッタ東京」のメンバーは、発足当初から基本的に変わっていないが、その当時は、将来が囑望される20歳代半ばの若い演奏家を中心に、実力ある中堅演奏家を加えて発足した。

10年経った今、当時「若手」だったメンバーは、現在では各々が所属するオーケストラで首席奏者を務めたり、音楽大学の教授・助教授等として活躍するなど、日本のクラシック音楽を支える中堅からベテランとして大きく育ち、年5回の「紀尾井シンフォニエッタ東京定期演奏会」に集うこととなっている。

まさに「日本代表チーム」の感がある「紀尾井シンフォニエッタ東京」だが、にわかに評価の上昇した人材を集めたのではなく、10年かけて築き上げてきたことが、支援してきた新日鉄文化財団の基本理念にある「育成」を具現化した好例といえよう。

「ドレスデン音楽祭」 音楽監督 ヘンヒェン氏との出会い

今回のドレスデン音楽祭での公演のきっかけは、「紀尾井シンフォニエッタ東京」がNPO法人化して間もない2003年2月、第38回定期演奏会の客演指揮者としてハルトムート・ヘンヒェン氏を招いたことに始まる。同氏の緻密な音楽作りと温かい音楽性は「紀尾井シンフォニエッタ東京」の持てる力をいかに引き出し、歴史的な名演ともいえるべきベートーヴェンの交響曲第6番「田園」が生まれた。



ヘンヒェン氏と「紀尾井シンフォニエッタ東京」(練習会場にて)

紀尾井ホール：新日鉄創立20周年記念事業として1995年春にオープン。新日鉄およびグループ各社によって創立された(財)新日鉄文化財団によって運営され、社会の良きパートナーとして音楽文化活動を推進している。



ゼンパー・オパーでの演奏 (Thilo Fröbel)

この公演のリハーサルの中で、指揮者のヘンヒェン氏は、後に「一目ぼれだった」と語っているように、「紀尾井シンフォニエッタ東京」との出会いを高く評価し、自らが総監督を務めるドレスデン音楽祭への出演の話が持ち上がった。

ドレスデン音楽祭は1978年に始まった音楽祭で、東部ドイツの古都ドレスデンが持つ偉大な伝統をテーマとするオペラから生まれた劇音楽をプログラムの重点に置くドレスデン出身のアーティストを起用することを特徴としている。2002年からヘンヒェン氏が総監督となり、新たなテーマと斬新なアイデアで観客動員を大幅に増やし、ドイツ最大の音楽祭となった。

“レジデント・オーケストラ”として 中心的役割を果たす

今回の音楽祭で、「紀尾井シンフォニエッタ東京」はベートーヴェンのピアノ協奏曲全曲のほか、2005年ドレスデン音楽祭のテーマ「未知なるもの、異種なるものへの興味」に沿ったハルトマンの協奏曲や、めったに演奏されないことがないメンデルスゾーンの交響曲第4番「イタリア」《改訂版》など、合計12曲、4公演を行った。この音楽祭で1つのオーケストラが4公演を受け持つのは過去においてドレスデン・シュターツカペレ、ドレスデン・フィル、ドレスデン聖十字架合唱団だけで、今回「紀尾井シンフォニエッタ東京」は「ドレスデン音楽祭2005」の中心的役割をな



ワーグナーが活躍し、R.シュトラウスが名作を残したゼンパー・オパーの夜景
す“レジデント・オーケストラ”という名誉あるタイトルでの出演となった。

音楽祭の音楽監督であるヘンヒェン氏、そして1982～1992年までドレスデン・シュターツカペレの常任指揮者を務め、東西統一やさまざまな再建にも立ち会った若杉弘両氏の指揮のもと、ドレスデン生まれのベテランピアニスト、ペーター・レーゼル、2001年エリーザベト王妃国際ヴァイオリンコンクールに優勝した話題の新人パイバ・スクリッド、現代を代表するクラリネット奏者ポール・メイエなど、豪華アーティストたちとの共演が実現した。

会場はR.ワーグナーが活躍し、R.シュトラウスが名作を残した殿堂ゼンパー・オパー、演奏会場としては初めてとなる日本宮殿、約750年前に建てられた荘厳な雰囲気漂う



アウグスト強王が収集した陶磁器の保管のために建造した日本宮殿



日本宮殿中庭での演奏

(Thilo Fröbel)



マイセン大聖堂での演奏



(Thilo Fröbel) 約750年前に建てられた荘厳なマイセン大聖堂

マイセン大聖堂と、屋外も含んだ音楽祭ならではの3会場がその舞台となった。

大きな期待をもって、ドレスデンに降り立つ

今回の公演は音楽祭側からの招聘であり、先方からは出演料が支払われる。しかし、指揮者若杉弘氏、「紀尾井シンフォニエッタ東京」演奏者41名、スタッフ7名の総勢約50名による2週間の演奏旅行となり、交通費、宿泊費、楽器等の運送費も相当額となるため、事務局では、持ち出し費用削減に対する、最大限の努力をした。成田からドレスデンまで途中フランクフルト経由でトランジットして約15時間、メンバーはエコノミークラスだ。宿泊は合計12泊となるため、内部はきれいに改装されているものの、旧東ドイツ時代に作られたアパートの外観を残す、いわば「ビジネスホテル」を選んだ。

今回の音楽祭参加に大きな期待を寄せていた一行は、5月10日夕刻、ドレスデンに到着した。この地は、指揮者の若杉氏にとって15年前まで10年間にわたり、常任指揮者として活躍した街。空港には懐かしい顔が出迎えた。一方、海外留学や演奏の機会が豊富なメンバー構成だが、大部分のメンバーにとっては初



宿舎となったホテル

めての地だった。しかし、そこはさすがに海外演奏旅行にも慣れたメンバー。思い思いにデパートやスーパーにミネラルウォーターや基本的な生活用品を調達に向き、レストラン情報を交換する。

本番を前に、緊張高まるリハーサル

一日のオフをはさみ、5月12日から公演前の練習が始まった。ホテルと練習会場であるゼンパー・オパーの間はバスが送迎する。ドレスデンは小さい町なので、天気が良ければ歩いて会場に向かえる。練習会場は、楽屋口から入り、迷路のような通路や渡り廊下を通り、エレベーターで4階まで上った大きな練習室だ。しかし、ゼンパー・オパーの歴史を思わせるホールに比べると、至ってシンプルな練習会場だ。練習初日はまず、若杉氏の指揮、ペーター・レーゼルのピアノだった。リハーサルは真剣そのものだ。

13日朝、9時30分ごろメンバーは練習会場に到着。すぐ、それぞれに準備を始める。午前中はヘンヒェン氏の指揮で、ペーター・レーゼルのピアノ。まずはレーゼル氏が会場に入りピアノに向かう。やがてヘンヒェン氏が到着し、レーゼル氏と簡単に打ち合わせ、10時になると、指揮台に立った。4月初めの紀尾井ホールでの公演から間もないこともあり、とても打ち解けた雰囲気の中、「今回の公演を成功に導きましょう」と簡単な挨拶を終えると、初日の演目で最も演奏時間が長い、ベートーヴェンのピアノ協奏曲第4番が始まった。さすが国内外有名オーケストラの首席奏者級の集団だけにリラックスした中にも緊張感がみなぎる。メンバーと指揮者のアイコンタクトからお互いの信頼関係が



練習風景





ゼンパー・オペラにおける演奏風景

わかる。楽章ごとに確認が終った際のヘンヒェン氏の「Thank you very much」が印象的だ。ポイント・ポイントを丁寧に仕上げながら、楽曲が完成されていく。

夕刻より行われた若杉氏指揮のリハーサルでは、前回の課題が詳しく説明され指示が出される。合間合間ではメンバーの間でも積極的に議論が行われている。チームワークにはコミュニケーションが欠かせない。若杉氏も15年ぶりのドレスデンでの演奏で、リハーサルにも力が入る。このようにリハーサルによって真剣な曲づくりが行われていく。

聴衆と一体となり、 スタンディング・オペーションを受ける

いよいよゼンパー・オペラでの本番初日。午前中のリハーサルに続き、午後はホールで最後の音合わせだ。傍から見ていても、緊張感の高まりと曲の完成が分かるような気がする。舞台から見上げると4層の桟敷席が会場を包み込む。2度の再建を経たホールではあるが、歴史を感じることのできる歌劇場だ。

16時の開演が近づくとロビーには続々と聴衆が集まり始める。ほぼ満員の観客席は開演を待つばかりとなった。皆それぞれに本日の未知なる演奏への期待にあふれているようだ。初日はヘンヒェン氏の指揮、ペーター・レーゼルのピアノによりベートーヴェンのピアノ協奏曲第2番、第1番、第4番の順に演奏が行われた。これは、作曲された順番だという。どの曲の演奏も、盛大な拍手で賞賛され、最後はこの地でも珍しいといわれる全員のスタンディング・オペーションで18時にこの日の幕を閉じた。



(Thilo Fröbel)

スタンディング・オペーション

翌日は11時から演奏のため、9時からホールでの音合わせが始まる。この日の指揮は若杉弘さん。11時の開演には、昨日同様、大勢の聴衆が集まった。演奏される曲は同じくベートーヴェンのピアノと管弦楽のためのロンド変口長調およびピアノ協奏曲第3番と第5番「皇帝」だ。ベートーヴェンの全ピアノ協奏曲を2日にわたって弾きこなすレーゼルのバイタリティもすごい。そして、第2日も、全員スタンディング・オペーションの大喝采の中で、幕を閉じた。

第3回目の公演は、5日後の20日。会場は、アウグスト強王が日本の伊万里焼に魅せられて、陶磁器の制作を始めたことで知られるマイセン。ドレスデンより北にエルベ川に沿って約30キロの町だ。ハプニングが起きた。通常であれば30分もあれば到着するいわば隣町だが、16時半からのリハーサルのため、15時にドレスデンを出たバスは途中で交通事故による渋滞で足止めされた。結局パトカーの先導で迂回し、17時50分にマイセンに着いた一行は大急ぎで着替え、わずか30分の短時間で音合わせを行って19時半からの演奏にギリギリ間に合った。このようなトラブルに遭遇したこの日の演奏も、多くの聴衆が立ち上がって拍手を送り、大好評だった。

翌21日は今回の音楽祭における「紀尾井シンフォニエッタ東京」の公演最終日。あいにく天気予報は雨。しかし、先日の日本公演で共演したクラリネットのポール・メイエ氏とヘンヒェン氏の指揮に、天候はどうやら持ち、大好評のうちに無事演奏を終えた。

また、一連の公演は地元でも評価が高く、新聞各紙等で絶賛された。



大成功をおさめ、 尽きない名残り

最終日、宿舎となったイビスホテル・リリエンシュタインのバーを借り切って行われた打ち上げの会には、ヘンヒェン氏、ポール・メイエ氏、若杉氏をはじめ、音楽祭関係者のシュレーダーさんなどが集まった。会場では口々に、再び共演の機会を望む声があがり、今回の成功に名残は尽きなかった。

ドレスデン音楽祭では、メインのオーケストラである「紀尾井シンフォニエッタ東京」の演奏のほか、ジプシー音楽や、エルベ川沿いの町にある小さなホールや古い教会などを会場にした3つのコンサートとワインを楽しむツアーなど、盛りだくさんの企画が実施され、街角ではポルトガルのファドなども披露され、大勢の観光客や地元の人々が音楽に浸



打ち合わせをする町田事務局長とシュレーダーさん



演奏を終えたメンバー



ドレスデン音楽祭のひとつ
エルベ川下りのコンサートツアー、小さな町の

《大きな成功で、日本におけるさらなる課題を痛感》

ティンパニ奏者 ^{たがあき} 近藤 高顯 氏



世界で初めて作られたペダル式ティンパニ

8年ぶりに降り立った夏時間のドイツは、夜の8時過ぎだというのにまだまだ明るく、それが私には何とも懐かしく嬉しかった。私の16年来の大親友、トーマス・ケプラー（ザクセン州立歌劇場の首席ティンパニ奏者）に出迎えられた私は、いきなり彼の車で、ドレスデン市内を案内された。古都ドレスデンは想像をはるかに越えて

素晴らしく、それはそれは落ち着いた魅力的な都市だった。

ティンパニ奏者である私にとってドレスデンという街はただならぬ意味をもっている。現在、あたり前のようにオーケストラで使用されている“ペダル・ティンパニ”は、ここドレスデンで生まれた楽器なのである！

翌日、彼に招待され、まさにここゼンパー・オーバーで初演されたワーグナーの“さまよえるオランダ人”を鑑賞できた私は、室内乐的とも言えるその伝統的な演奏スタイルに、新たなカルチャー・ショックを受けた。残響が特に豊かでもないのに、何と自然で“温かい響き”のホールであろうか!!!

そこで行われた14日と15日の私たちの公演は、それはそれは温かく迎えられた。実力以上の力を発揮できた「紀尾井シンフォニエッタ東京」の演奏は、その質実剛健なソロを奏でたP.レーゼルの音楽そのものに導かれ、触発され、そしてそれは終演後のスタンディング・オベーションに至るまでの“温かい聴衆との音楽での交流”があってこそ初めて成し得た賜物であった。聴衆とホールとオーケストラ。大きな成功を収めたドレスデン音楽祭における2週間は、日本での今後の大きな課題を痛感させられた日々でもあった。

《素朴さと繊細さに衝撃。ドイツ音楽への造詣が深まった2週間》

オーボエ奏者 ^{かきざき} 蛸崎 耕三 氏



ベルリン以外の旧東独に足を踏み入れるのは初めてのことでした。20年以上前に東ベルリンを観光し、本当に物資に乏しかった当時の様子を目の当たりにした衝撃は今でも忘れません。壁が崩壊して15年、現在のドレスデンはすばらしく豊かな町でした。戦争の爆撃で崩壊した建物も次々に修復が進み、社会主義時代の暗さも全く感じられません。

音楽祭で私たちと一緒にすばらしい演奏をした指揮者のヘンヒェン氏とピアノのレーゼル氏は、2人とも生粋のドレスデン育ちとのこと。世界的に派手なパフォーマンスと大きなインパクトばかりが好まれる昨今、彼らの音楽の素朴さと繊細さには衝撃すら覚えました。40年以上国際社会から全く封印された特殊な環境下で、ひたすら純粋に音楽と向き合ってきた結果ではないでしょうか。私たちが日頃忘れそうになっている大切な物を思い出させてもらった貴重な体験でした。「紀尾井シンフォニエッタ東京」も日頃の緻密な演奏に加えてドイツ音楽への造詣が確実に深まった2週間でした。



ホールや古い教会でコンサートが催される

った2週間だった。

これからの 『紀尾井シンフォニエッタ東京』

今回の、ドレスデン音楽祭における招聘公演の大成功は、新日鉄の音楽面での文化貢献活動の柱である新日鉄文化財団の活動として、次の2つの意義がある。

ひとつは、音楽文化を支える人材に対して、時間をかけて、育成の場と機会を提供してきたことが、ひとつの成果となったことだ。そして、もうひとつは、その活動がまさに「本場」からも高く評価され、今後の国際的展開に橋頭堡を築いたことだ。

次の日のエルペ川下りコンサートツアーに電気計装関係のエンジニアをリタイヤしたご主人と一緒に参加した地元ドレスデンの女性は、『紀尾井シンフォニエッタ東京』

のコンサートはすばらしかった」と感動の一端をのぞかせた。耳の肥えた地元の市民にも「東京のオーケストラ」を強く印象付けたようだ。そして、「紀尾井シンフォニエッタ東京」の帰国を待たずして、ヨーロッパ各国の音楽祭等から招聘の問い合わせがきている。

今後、新たな飛躍のステージを迎えた「紀尾井シンフォニエッタ東京」は、通算約40回にわたる皇室のご来臨でも評価が高まっている紀尾井ホールの活動等と相まって、新日鉄の文化貢献事業として育っていくことが期待されている。

活動内容の充実化は、効率的運営を前提としながら、一方でそれに見合う財政的な裏づけを必要とする。50年にわたる新日鉄の文化貢献活動、そして10周年の新日鉄文化財団が、今、新たな飛躍の時を迎えている。

《この感動の共有が、紀尾井の音づくりに活かされていくと確信》ヴァイオリン奏者 千葉 純子さん



心待ちにしていたドレスデンへの演奏旅行を無事に終えた今、安堵感と共に、貴重な2週間を過ごせた喜びを感じている。

街は想像以上に豊かで美しく、落ち着いた印象を受けた。建物のほとんどが、戦後に復元された物であることを知り、復旧へ向けた市民の執念を強く感じた。

4回あった演奏会のうち2回は、ワーグナーのタンホイザーが初演された歴史的な劇場であるゼンパー・オペラで行われた。ベートーヴェンのピアノ協奏曲をペーター・レーゼン氏と共演し、スタン

ディング・オペーションで聴衆が一斉に立ち上がった時の興奮は忘れられない。

マイセン大聖堂での演奏会では、バスで会場に向かう途中、事故渋滞にはまり、リハーサル時間がほとんどとれないまま本番を迎えた。会場は今までに経験したこともない位の寒さで、ドレスの上にセーターを重ね着したほどであった。色々なハプニングがあったにもかかわらず、本番では気持ちが一つに集まり、いいアンサンブルが生まれていると実感したのは私だけではなかっただろう。

最後の演奏会は、日本宮殿中庭の野外で行われた。風で譜面がめくれたり、太陽が楽器に照りつけるなど、多少困ったこともあったが、自然を感じながらの演奏が心地よく新鮮だった。

この演奏旅行を通じて、メンバー全員が同じ体験をし、感動を分かち合えたことが、「紀尾井シンフォニエッタ東京」の音づくりに必ず反映されていくと信じている。

ドレスデン音楽祭2005 紀尾井シンフォニエッタ東京 演奏プログラム

2005年5/14(土) 16:00 ゼンパー・オペラ

指揮：ハルトムート・ヘンヒェン ピアノ：ペーター・レーゼン
ベートーヴェン：ピアノ協奏曲 第2番 変ロ長調 op.19
ベートーヴェン：ピアノ協奏曲 第1番 八長調 op.15
ベートーヴェン：ピアノ協奏曲 第4番 ト長調 op.58

2005年5/15(日) 11:00 ゼンパー・オペラ

指揮：若杉 弘 ピアノ：ペーター・レーゼン
ベートーヴェン：ピアノと管弦楽のためのロンド 変ロ長調 WoO.6
ベートーヴェン：ピアノ協奏曲 第3番 八短調 op.58
ベートーヴェン：ピアノ協奏曲 第5番 変ホ長調 op.73 「皇帝」

2005年5/20(金) 19:30 マイセン大聖堂

指揮：若杉 弘 ヴァイオリン：バイバ・スクリッド
武満 徹：弦楽のためのレクイエム
モーツァルト：ヴァイオリン協奏曲 第5番 イ長調 「トルコ風」
メンデルスゾーン：交響曲 第4番 イ長調 op.90 「イタリア」(改訂版)

2005年5/21(土) 14:00 日本宮殿 中庭(ドレスデン)

指揮：ハルトムート・ヘンヒェン クラリネット：ポール・メイエ
弦楽四重奏：Kioi Quartet (豊嶋泰嗣・玉井菜採・馬淵昌子・丸山泰雄)
ハルトマン：クラリネット、弦楽四重奏、弦楽オーケストラのための室内協奏曲
モーツァルト：「エジプト王タモス」K.345 (K.336a) より 幕間の音楽
モーツァルト：交響曲 第35番 二長調 K.385 「ハフナー」

今回参加した紀尾井シンフォニエッタ東京のメンバー

ヴァイオリン：今井睦子、小川有紀子、景山裕子、鎌田泉、澤和樹、玉井菜採、千葉純子、寺岡有希子、徳江尚子、豊嶋泰嗣、原田幸一郎、山崎貴子、山本千鶴、山本はづき、米谷彩子 ヴィオラ：安藤裕子、市坪俊彦、大島亮、亀井綾乃、篠崎友美、馬淵昌子 チェロ：北口大輔、河野文昭、丸山泰雄、室野良史
コントラバス：池松宏、河原泰則、永島義男、フルート：一戸敦、難波薫 オーボエ：嶋崎耕三、成田恵子 クラリネット：鈴木高通、鈴木 豊人
バスーン：大澤昌生、堂阪清高 ホルン：樋口哲生、和田博史 トランペット：飯塚一郎、杉木肇夫 ティンパニ：近藤高顯
スタッフ：町田龍一、森奈都子、別府一樹、宮崎隆男、野村寛郎、井上昌彦



「紀尾井」のクオリティの高さに 「一目惚れ」しました。

指揮者・ドレスデン音楽祭総監督

ハルトムート・ヘンヒェンさん へのインタビュー

プロフィール ハルトムート・ヘンヒェン
1943年ドレスデン生まれ。ドレスデン音楽大学を卒業し、71年ウェーバー指揮コンクールで優勝。ベルリン国立歌劇場常任客演指揮者、ベルリン・コーミッシェ・オーパー常任客演指揮者、ベルリン・パツハ(C.P.E.パツハ)管弦楽団音楽監督。ネザールランド・フィルおよび、ネザールランド室内オーケストラの首席指揮者、ネザールランド歌劇場の音楽監督を歴任。またベルリン・フィル、ドレスデン国立歌劇場管弦楽団、アムステルダム・コンセルトヘボウ管に客演。2002年よりドレスデン音楽祭の音楽監督を務めている。2005年ドレスデン音楽祭では、「紀尾井シンフォニエッタ東京」をレジデント・オーケストラとして招聘。

「扉を大きく開く」ドレスデン音楽祭。

マエストロにとってのドレスデン音楽祭とは何かをお聞かせください。

ドレスデン市から私に音楽祭の総監督の依頼があった理由は、ドレスデン生まれであるということ、それからドレスデンの5つの音楽機関、ドレスデン・シュターツカペレ(ザクセン州立歌劇場管弦楽団)、ゼンパー・オーパー(ザクセン州立歌劇場)、聖十字架合唱団、ドレスデンフィルハーモニー、音楽大学の全てと関わりを持っているということ。もう一つには、20年ほど海外で仕事をしていましたので、内側からも、外側からもドレスデンを見られるという点だと思っています。

2003年に「紀尾井シンフォニエッタ東京」の客演指揮をしていただき「一目惚れ」をされたと伺いました。

これまで、さまざまな国を訪れ、さまざまなオーケストラを指揮しています。中にはあまり交流がなくさっぱりとした関係のオーケストラもあります。それは決して言語の問題ではありません。お互いを深く理解できないまま終わってしまうことは残念なことです。しかし「紀尾井シンフォニエッタ東京」は、メンバー一人ひとりから「音楽的な考え方を実践していこう。音楽の中に深く入り込んでいこう」という強い意志が私に伝わってきました。それが私を魅了した最大の理由です。

「未知なるもの・異種なるものへの興味」というテーマである今回のドレスデン音楽祭に「紀尾井シンフォニエッタ東京」を招聘していただいた理由をお聞かせください。

最大の理由はクオリティの高さです。「紀尾井シンフォニエッタ東京」は世界の優秀なオーケストラに匹敵する素晴らしいオーケストラです。加えて、全てのプログラムにふさわしいオーケストラだと考えたからです。日本の方にとって西洋音楽は、それ自体が「未知なるもの・異種なるものへの興味」から始まっているものです。そして、ヨーロッパのお客様にとって、日本のオーケストラが自分たちの伝統である音楽を演奏することは、「未知なるもの・異種なるものへの興味」です。日本のオーケストラが演奏すること、これは、テーマを両方の視点から見られることです。また、「日本宮殿」(東洋磁器の収集家で有名なザクセン選

定侯フリードリヒ・アウグスト1世が自らのコレクションを収めるために建てた東洋風の建物)で演奏できるということも、素晴らしいことだと思っています。

紀尾井ホールをこのままドレスデンに持って帰りたい。

新日鉄の文化貢献活動をどのようにご覧になりますか。

「紀尾井シンフォニエッタ東京」が新日鉄の全面的なサポートを受け、さらにこの素晴らしいホールで活動できるということは本当に賞賛に値することだと思います。ドレスデンにはこの規模のいいホールがないこともあり、紀尾井ホールは私にとって本当に理想的で大好きなホールで、できればこのまますっぱりドレスデンに持って帰りたい(笑)と思っているくらいです。

クラシックは発見をもたらす音楽。

日本の皆様に呼びかけたいことは、ぜひ好奇心を持っていただきたいということです。クラシック音楽愛好家の方には、さらにまた新しい発見をするために好奇心を持っていただきたいですし、クラシック以外の音楽が好きな方にはクラシック音楽に対してもオープンでいてほしい、好奇心を持って接していただきたいと思います。クラシック音楽はどなたにでも発見をもたらしてくれる音楽です。そして人としての感情を育成し、人としての教養を見つけるという意味において、クラシックほど素晴らしい音楽はないと私は思っています。

「紀尾井シンフォニエッタ東京」との次のコンサートでは、モーツァルトの最後の3つの交響曲をやりたいと思っています。一晩で3曲やるというのは私も未経験なので、実現できたらなと思っています。そしてその次に「紀尾井シンフォニエッタ東京」とやるときには、ぜひ「マタイ受難曲」をやりたいと思っています。

(2005年4月1日 来日公演時に東京都内にてインタビュー)

